流離

安部孝作

※　※　※

持ち主がいなくなった途端に騒がしくなるものたち、この部屋はかつてこんなにも散らかっていただろうか？……わたしはその中から一つの箱を見つける。なにかが染み出している段ボール箱。近づけば臭いが強くなる。けれどもわたしはそれに手を差し出し、残された箱を開いた。そしてその中には、たくさんの夏みかんが入っていた。爽やかな中に、どろっとした苦い臭いがする。すこしのけてみると、下の方は傷んで腐り始めていた。

――そして忘却の果てに流れ去ったある一日を思い出した。

※　※

電車は駅から出られず立ち往生していた。このまま出られなくていいのではないかと思った。混雑して蒸れた車内は、一段と冷えて、おしあいへしあいしている。僕はこのまま押しつぶされていくのかと思った。車窓は曇って外が見えない。いくつもの水滴が垂れ落ちてゆくのをじっと見ていた。そしてアルミの枠に弾けて、蚤よりも小さい飛沫となり消えていったのを。このままこの身動きの取れない中で、待ち続けているだけなのか。待つ……一体誰を？……一体なにを？……線路内に立ち入った、たった一人の人間を、それとも、その人間が正気を取り戻すのを……誰が取り戻してあげられるのだろうか、その人の正気を。誰が連れ出してあげられるのか、その生から。機械はそうした人にも仕えるべきなのだろうか？……電車はあっという間に仕事を終わらせるだろう。けれども人の手によれば、違う意味が持てるのではないか。同じ旅路を行き、帰還した時に同じ地平が拓けるとは限らないのだ。

叫び声がした。それは錆び付いた螺子のような音だった。それは残響として苦々しいものを遺していった。ここにいる日常的な空間にいて、今朝もどこかへ向かわなければならない人々に、逃れられないことを宣言するのだ。この電車がこうしていつまでも人々を閉じ込める事に意味はないだろう。朝からただでさえ不条理な状況に置かれているのにもかかわらず、逃れ得ない苦しみを共有することにぞっとしない人はいないだろう。僕もまたぞっとして、鞄を落としそうになった。そうなれば誰かの足に当たってしまうだろう。そして僕は鞄を拾えないまま姿勢を維持せねばならないだろう。

がたんごとんと大きく揺さぶって、電車は漸く動き始めたようだった。この冬のある日に、一体どれだけの人が、僕がもうなにごとか心の中で諦めていることを知るだろう。時計を見なくとも判るのだ。もう間に合いやしないと。一体どれだけの人が、いつもなら、あるいは他の誰かなら容易にこなし、過ごせていけた物事を、たった一つの思わぬ出来事で不可能とさせられなければならなくなるという経験をしたことがあるのだろうか。それは誰にでもあることだろう。だがひとつひとつの出来事は？……それは不可能の環に閉ざされている。その結果、容易に過ごした人やこなした人は思うだろう、それは些細なことだと。それはあなたに限った話に過ぎない、と。こっちは対応しかねると。あなただけが被るならば、あなたに非があるのだ、と。僕がこうした一人の自殺を望む人間のせいで受験会場に遅刻したからといって、僕が受付をする時試

験監督はどれほどの寛容をもって対応するだろうか。時間は常に喪われ続けている。だからもう逃れられないのだ。もしそこから逃げようとすれば、そうすればするほど、そのものを良く識ることになるだろう。

電車は動きだしたと言うのに、一体なにから逃れられると言うのか。避けられない壁に向かってつっこんでいく無謀な運転に過ぎない。どうか止めてくれ。せめて僕をここから出してから発車してくれ。もう間に合いやしないのだ。すっかり諦めてしまっているのだ。もう家に帰って眠ってしまいたい。これからどうするかなど、なにも考えたくないが、きっと明日には頭の中を巡り始めるだろう。だからそうなる前に眠っておきたいのだ。疲労、あるいは弱さというのが与える悪夢と出遭って、そこから醒めてみたいのだ。

※

父の実家から夏みかんが大量に届いた。宅配便の人の筋肉の浮き出た腕から滲んだ汗は、その筋に従って流れていた。すっかり暑い夏である。あっという間の半月だ。みかんには労いの言葉と様子を伝える手紙が添えられ、封筒には五千円札が数枚入っていた。

浪人生になってからというものの、まだ大学生になっていない僕を差し置いて、両親は早くも手が離れたという感じで寛ぎ始めていた。そして、この夏はみかん農家をしている父の実家に行って作業を手伝ってくるといって二人は出て行った。出発の一週間前に、なにやらごそごそして荷造りをしているから何事かと思ったら、この通りであったのだ。特に重要なことという感じもなく、母は事情を述べるとそのまま黙々と作業を続け、父はトイレへ入っていった。何事もないかのように……僕はこうして一人で今家で過ごし、受験勉強をしている。それで何の問題も確かにないようだった。だからそれはさして重要じゃないと思われているのだろう。いつもそうやって扱われるのだ。――だからそうやって扱ってしまうのか。――過酷な闘いというのは、肉体と精神の淵を潜った先に用意されている。しかしたった一人の人間――それも自己――の奥へと沈潜していくことは、沈没船に似た虚しさと忌々しさが付きまとう。それはあたかも失敗で、後となれば幽霊船となって世界中の海を漂泊するかのようだ。深海に沈み、朽ちて行った数々の船たち。無数の貝や海老、磯巾着に蝕まれ、腐りつつある海藻を巻き付け、穴という穴から魚が出入りするあの骸。それとなり果てるべく、僕は今勉強しているのだろうか――受験まで、僕はただひとり閉じこもって勉強していたのだから、「そのままお家にいてくれればいい」と言っていた。その通りであった。別段問題らしい問題などなく、こうして二人が収穫した夏みかんの詰まった段ボールを受け取った。そして昨日までのように、明日からなにも受け取るもののない日が続き、いつか二人が帰ってきても、なにも変わらず僕は勉強していればいいのだった。――その通り勉強していればいいのだった。

だが僕はわかっていた。溺れかけて、顔は半分より出ず、息はもう尽きかけていることに。みかんの爽やかながら、熟な甘い香りはまるで憂鬱そのものであった。それは陽を沢山浴びながらも、深く濃い影を作らねばならない人間の宿命ではないだろうか。人はそのままそれを踏みながら歩くのだ。ペーター・シュレミールのように、それをもし悪魔にでも売ってしまえればどれだけいいだろうか。そのために彼は金を手に入れた。だが、僕は肉体の喪失を買うのだ。そうして淵を失くし、断崖絶壁で僕は立ち尽くす。そこからはもう、無限は消え去り、奥底には死のみが用意されている。とはいえ、彼の懊悩に比べれば、僕のことなど些細なことだろう。なぜならそれは、ありふれているから……そして、あまりにありふれているけれど、みな容易に乗り越えていくから……。彼らは影を踏まずに生きる術をしっているのだろうか。

模試も先週受けて、自己採点も済ませてある。まずまずの点数で、あとは結果を待っているだけだ。まだ夏休み期間中であり、受験当日までは日数がある。目の前に積まれた参考書は殆どが済ませてある。だからといってもう終わったわけではない。その間もまた勉強しなければならないのはわかり切ったことだった。けれども、できなくなっていた。重たくなった身体をなんとか擦りよせて机に就いた。だが、ノートにおかれた手はもじもじとして一向に動こうとしない。鉛筆は海老のように痙攣している。頭でいくら念じても全く身体は動かない。義務感に突き動かされるのは心だけだった。僕はこの瞬間精神の浜辺に立っていた。朝凪の時間、柔らかく心地よい陽射しが誰もいない浜を照らしていた。すっかり静まり返った世界で、更紗のように整った紋様を描く浜砂に、足跡だけが厚かましくも点いていく。肉体の海はどこまでも茫洋としている。その上には千切れ雲がいくつもあるが、一つたりとも動かないで、ぴたりと止まっている。それは絵のように不自然だった。

机の上に広がったままの物理の問題集、そこに書かれた力学の問題を見つめる。鉛筆を握った手は動かないから頭の中で考えるだけは考える。しかし必死に考えようとするが引っかかりがない。進展していかない。摩擦をすっかり喪った脳味噌は、エンジンをふかせるばかりだった。耳元で問題の中のバイクが唸るのが聞こえる。バイクは快活なエンジンで、颯爽とした走りを見せる。砂埃をあげながら山道を一気に駆け下る。脳味噌が揺れる。液体が鼻から垂れ落ちそうな感覚に囚われる。ゆっくりと手で押さえてみると、融けた脳味噌なんかではなく、単なる透明の鼻水だった。そこで視界がぼやけていることに漸く気付く。瞼からせり上がって涙が溜まっていた。それはもう零れてしまうだろう。

僕は転がすように椅子から身体を落として、とにかく横たえた。それはこれ以上自重に耐えられそうになかった。その場で糸を切られた操り人形のように、がっくりとうなだれたり、天井を見上げていたりしたら全く不気味だ。口は開きっぱなしにも閉じっぱなしにもなるだろう。目は開かれることはあるのかどうか知らない。とにかく、こんな人形はきちんと片づけておかないといけないのだ。それが無理ならせめて横にして隠しておかないといけない。僕は転がっていた、そして布団の上に辿りつくなり、逆回転して布団を巻き付けていた。そしてそのまま息をひそめているようだ。人形のようにできるだけ息をしないようにしているらしい。何もかもが他人事のようだった。僕は僕を観察していた。その行動はどれもこれも理解できなかった。

勉強をできない。鉛筆を動かせない。席に就くのがやっと。……ああ、あほくさ。

どれもこれもあほくさい悩みだと思った。けれどもこれが今の僕の頭の中を占めている。キップルの原理はここでも有用だ。あいつはただのパート野郎じゃないな、そう思った。多分想念の多くはキップルのようなものだ。そしてそれをなんとか無くしていくこと、それ自体が思考である筈だった。だけど僕の頭の中では今思考は働かなかった。何もかもが分解されていってしまう。片づけていこうとする思考自体が解体され、キップルとなり果てる。そこに余地などなかった。全ては分裂による瞬間的な隙間があるだけで、そこは充満しきっていた。今にもこの水槽は硝子が砕けるだろうと思った。何が飛び出すか、金魚がいても、それはなにも可愛くない、むしろ醜悪となってしまうだろう——解体してしまう——事故、全ては事故的だった。僕はその事故の責任を取りたくなどなかった。それは事故をおこすべく既にそこにあった。

物理の問題集も、僕も、なにもかもが既にそこにあり、閉じられることもなく、解かれることもなく、むしろそうされるのを待っているだけの存在として横たわっている。用意しておく存在は、用意してもらえない。だから肉体をはぎ取られてしまっている僕は今、布団にくるまった影の中で安心していた。なにかに包まれていたいと思うのだった。それ

は用意してくれている存在だ。常にそこにあってくれる。あとは、幸福だとか安らぎは感じるか感じないかの問題となるだろう。けれどもそんなもの僕にはなかった。

受験勉強でさえ、全く集中できないのだ。一体なにを感じ取れるのだろう。肉体と言う偉大な感知器を失くしてしまって、僕は一体何をもち得るのか。憂鬱は黒い引き潮となって僕をさらっていくだろう。そして、船が沈むように――それは事故だと言い張る人々がいるだろう。確かに事故だ。それは重大な欠陥による――僕は溺れ死ぬ――これは事故だ。だがその責任はとれない、僕は失敗していない――けれど、藻屑となり果てる前に遺す言葉はこれでいいのか？――

電話が鳴った。出ないでいると留守番電話に切り替わる。高校時代の同級生のYだ。久し振りに聞く声のようだ。「おーい、いませんか？　まあいい。どっか旅行行きたいから折り返し電話をください。お願いしますねー」すこしよそよそしい口調は変わりなかった。半月で何が変わるかとも思った。しかし僕にはなにもかも変わってしまった気がする。なにもかも変わらなければいけないだろうと思う。

※

夜になって掛け直すと、Yはもう風呂から出てきたところだった。僕は今夏みかんを二つ食べて夕飯を済ませたばかりだった。Yは早速という風に、伊勢参りだけして鳥羽に海を見に行こうと提案してくれた。陽気でぬくもりある声がする。僕が行きたいと言うと、Yは「あんまり元気なさそうだけど大丈夫か？」と言う。僕は「大丈夫、行こう。行けば何とかなる」と言うと、Yは「そうか。無理すんなよ。勉強し過ぎだから疲れたんだよ」と言った。それだけのやり取りで十分だった。それで出かける事になった。こんなに重たい身体は、小舟に積み、水に流して葬ってやらねば動きもしなかった。死体が自分で動いて自分で舟に乗るなど考えられないが、とりあえずYは積んではくれた。あとは流れていればいいのだ。今の電話でもすっかり疲れてしまい、その日は歯を磨くだけで眠った。

それから三日間殆ど寝て過ごしてしまった。何事かわからない対象に非常な苛立ちを感じていた。そして暴れまわると、とたんに力が抜けて眠ってしまった。それは醒めたような眠りだった。時計の数える音が聞こえるような眠りだった。なにがあったのか自分でも理解できない。そんな日々が続く。水が自身の動きを把握できないように――「水は低きに流れる」は今僕の中で違う意味に変わってしまった……それは憂鬱に沈んでいくことだ……「水は深きに流れる」と言ってもいいかもしれない……だが、意味が変わってしまうのは愚かであるだろうか……そうか、ならば僕は愚かだ――独り言で会話することもあった。問題集は開いたままだったが、とうとう僕は苛立ちに任せ引き裂いて床に叩きつけた。ばらばらになったページが躊躇うように宙で漂い、翻り、散り散りになった。後悔よりも先に次の敵がやって来た。時計は砕かれるべきだった。思考はなかった。これは全部事故だった。思考すべきだった。だが思考は事故で解体していた。あるいは破壊工作員がいるのではないかとも思える。とにかく全て崩壊へ向かっている感覚がした。

受験勉強一つでこうなるものだろうか――勿論僕は自分でも考えた。そして考える余地がないと気付いた。ただその繰り返しばかりだった。許し難いなにものかが僕の前に立ちはだかり、何時までも暴れていた。そして醒めたように眠った。バイクが家の前を何度通ったか数えていられるほどの浅い眠りだった。眠っている間にその何ものかは蘇るようだった、そして僕の傍にぴったりとついて、その冷たい手でやさしげに僕の髪を撫でているようだった。眠りは醒めるのを待たずに醒めていた。

そうして何とか三日間が過ぎると、朝方にYが迎えに来た。旅行に行

く日だった。僕の身体は重たく、荷物より重たかった――それは当然のことなのに、僕は漸くそれに気付いたのだ。全く愚かなんだ僕は――すこしふらつくように歩くと、Yは「大丈夫か?」と言うが、僕は「大丈夫、大丈夫。とにかく行こう」と言うばかりで、Yも「電車の切符は取ってあるから」と旅行に話題を切り替えた。伊勢神宮についてYが何か話し始め、僕は聞いては相槌を打った。彼は「聞いたことあるんだけど」と言う形で言葉を切って、僕がなにか返答するのを数秒待った話し方をした。僕がなにか喋らないかと待っていたのだ。それはぼくにはわかっていた。しかし頭はわけのわからないことばかり考えていた。……彼が今僕から話を引き出そうとしているが、決して話してはいけないのだ……ここでは聞かれている……聞かれたら、まるでカルト信者として捕まってしまう……誤解が多すぎるのだ……伊勢神宮はカルトじゃない、スピリチュアリズムでもない……けれど彼らはそれを口実にするだろう……自明のことほど彼らはすり替えに用いる……。

痺れを切らせたYは「本当に大丈夫か?」と再び訊いた。「本当は大丈夫じゃない」と僕は言った。Yは「わかってるよ」と言って笑った。僕には笑えなかったが、僕は自分の愚かさには気が付いていた。「水は低きに流れる」は再度僕の中で意味を変えた。――それは上がれないということだ……笑いのような上昇はあり得ないと言うことだ……「水は下流に流れる」と言ってもいいかもしれない……だが、意味が変わってしまうのは愚かであるだろうか……そうか、ならば僕は愚かだ――僕はつい口に出してしまっていた。Yは軽く笑って、下流は低いに決まっているだろう、と反復した論理を用いた。僕がそう指摘すると彼は「頭はいつも通り働くのかい?」と更に笑った。僕も反射的にすこし顔が綻んだ。面白いとか楽しいとかを感じなくとも、そこに鏡さえあれば、表情を変えることはできるようだった。僕はそうやってなんとかYに合わせられるようになってきた。

一つバスに乗ると、その揺れに身体がばらばらに踊るような感覚がした。Yは次第に額に汗のにじませていく僕に怪訝な眼を向けていた。「バス嫌いだった?」「いや」「そう。もうじき着くから、まあ、すこしの辛抱だよ」Yは呆れたように言う。バスは確かにすぐに終点に到着し、僕らは降りた。降りると、そこは街中だった、そこはまさに喧騒の塊だった。そして僕は、街中はこんなに混雑していたかな、と思った。混雑しているのは知っていた。もっと混雑している時に歩いたこともあった。けれどもなんだか意外な感じがしたのだ。Yは単に「久し振りだからだろう」と言った。「確かに前回来たのはタワーレコードにCD買いに来た一年前だ」、僕がそう言うと「あの時CD馬鹿みたいに買っていたもんね。あれ全部ちゃんと聞いた?」「うーん、まあ一応」「ずっとiPod弄っていたよね」「まあね」「まあいいか、とにかく歩こう」駅につくと改札のところでYから切符を受け取り改札に通す。足取りは重たいままだったが、すこしだけ話をする感覚を思い出した。

そうこうして快速電車に乗り込むと、景色はどんどん流れ去っていった。名古屋市の景色は滲んで、灰色の渦巻きとなった。そこにピンクや緑の玉が浮かび、呑み込まれている。すっかり漠然とした世界になった。普段はそこまでの変化を感じなかったが、今日は街中の様子はすっかり変わって見えていた。そして名古屋の中心街は、実際は流砂のような世界だと思っていた。Yにそういうと、彼は今日の僕が全く宛てのはずれたことを言っていると思っているのか、笑うだけだった。しかしその後、彼は「街もこうしてみるとあっという間に外へ出る事が出来るものだけれどな」と言った。僕は重力圏から逃れようとする歴代アポロの苦労の滲んだ姿を思い起こし、電車というのはなんと手軽なもので、都会とはなんと軽いものなのかと思った。この速さを思わせるデザインからかけ離れた、ただの四角く収納を優先させた物体が簡単に逃れ去ってしまうんだ、この都会とか言うのは。「それは線路を走るだけだからね」Yは

返事をする。僕は話していることと頭で考える事の区別がつかなくなってきていることに気が付いた。「そうか、だからついて来てしまうのか、いつまでも、それは」「結婚式の例の車に付いている空き缶のようにね」「なるほど」僕は奇妙なほどにその喩えが面白かった。キップルだ、ここでも――僕は笑いながらそう思った。スプートニクだってきっとコーラの空き缶を引っ張っていた。「少なくともコーラ瓶の王冠を抜いたのは確かだな」とYは言った。ポンっとなにか弾ける感覚が――音がした。僕は腹を抱えて笑った。Yはやはり軽く笑っていた。

※

暫くするとあっという間に景色は変わり、三重県内を走る電車は、いくつもの郊外らしい郊外を突き抜けていった。線路はアパートや低層マンションとの距離を一定に保ちながら走る。流れ去っていく数々のベランダでは洗濯物や布団が干してあった。今日は快晴だった。「旅日和でよかった」僕はぽつり呟くとYは「そうだな」とすこし薄暗い瞳を浮かべて遠くを見ていた。一体なにを見ているのか、僕はそちらへと視線を送る。するとその先には重たげな入道雲が大雨を降らせているのが見えた。ゲリラ豪雨と言うのは遠くからその様子が見ることができると聞いたことがあったが、本当のようだった。すこし離れた街は今、びしょびしょに濡れて、激しい雨に打たれている。その姿を浮かび上がらせるように雨は強く打ち付ける。雨という総体が街に触れて、その感触から姿かたちを見てとろうとするようだった。あるいは、粗雑に撫でまわしているようだった。それら二つ行為は時に同じであることがある――壊れやすいものは、そうして見えないところで破壊されている――見えないのに触れようとする者の肘によって。だが、雨はそこまでしない。それは決して鞭打たない。握手の痛みなど些細なことなんだ、それは情の証であるんだ。

僕は精神の浜の中で燦然と輝く日輪を前に、その姿を現しつつある向こう岸を期待して待っていた。座っているからといって、何時までも待てるわけではない。時折たちあがってうろつき回って、それでも待ちくたびれてしまう。寝ても待てるわけではない。寝ても覚めてしまって待てやしない。だがそもそも向こう岸の方角はどちらなのだろうか。陽の登る方か、沈む方か。それとも関係のない方か。だがそれはどうでもよかった。よく考えればこの浜こそ環礁の中の小さな砂洲のようなものに過ぎない。逃れられない中に僕はいる。包まれていると、僕には見えてなくとも、思えばいい。向こうには見えている、僕の姿が。空間は常に用意されている、時間は常に先回りしてくれている。僕は環礁がせり上がって来るのを心待ちにしている。そうして取り戻された明るい海は、光りすら到達しない奥底を用意してくれていると期待している。足で歩くことができると同時に、どこまでも潜っていける海を、眼の前にする時を待っていた。

「ねえ」とYが話しかけてきた。「伊勢神宮の外宮、次の伊勢市駅で降りて暫く歩くから」「おお、もうそんなに」「意外と近いよね。もっと早く行ってみればよかったよ」「それもそうだね」車掌が車内アナウンスを始めると、電車が減速し始め、周りの乗客が騒がしく降りる準備をし始めた。乗客の殆どが旅行客である様子だった。昔も今も伊勢神宮は随分な人気のようだった。それも「御蔭です」と言っていそうな年齢層だけでなく、若年層の客も多いのが印象的だった。かく言う僕らも若年層なわけで、きっと僕らと同じように気楽に――それでいて妙に信じやすく疑えない気持をもって――参拝するのだろう。それは信仰というには違うだろうが、観光や見学とはまた違う、素朴な信心なのだった。霊感を働かせ、神秘体験を得るには、夜空の星ひとつで十分なのだ――否、この素朴な信心たちは、恐ろしい言葉の使い手の存在をもっと日常的に

感じているのだ。それは無知による不安と恐怖、常に全く違う人間たちに囲まれ、実存の犯されていく感覚に囚われている、この素朴な信心家たち。

僕らはそういう群れの中に混じって電車から降りる。そして外宮行きのバス停を素通りして、一気に歩いていく。素朴な信心――それは神社の本義から外れるだろうか……？　だが熊野の九十九王子は殆どが社をもたない神々なのだ。それが素朴な在り方とは思わない。ただし、素朴からの洗練を予め規定している。留まれない者たちが素朴でいる事を赦している。そこには留まることも、そのための練達からの洗練など求められていない。僕ら素朴な信心家は常に原始へと遡って、常に異界にいる。僕らにとって、世界は余りに形をもち過ぎた異界だとも思える。もはや人間にそっくりな形で満ち溢れ始めているのだ。形づくるものたちは、しかし、形をもってはいけない。そして形づくるものは、いつも形づくられてしまう。僕はこのどうしようもない関係にうんざりとせねばならなかった。だからこそ僕らは素朴な信心家だ。形など信じない。形があることをどうでもいいと思っている。

街も田舎も神社もめくるめく変転していく。その流体力学の中で、重みあるものは沈んでいく、古層へと向かって沈められていく。二度と見ることの出来ないものへと変じていく。軽いものは浮かび上がり、いつまでも上がっていく。どこまでも際限なく上がることができると信じている。そしてやがて見えなくなっていく。僕ら素朴な信心家たちは、その中間の世界でいつまでも漂い、なにもかもが見えなくなっていく世界を生きている。その向こうにいるなにものかの動きに従い動きながら、その動きを正確に把握しようとしながら、その動きに疑うことなく抵抗しようとしている。形あるものたちはどこかへ消え去ってしまう。崩れ去っていくことを知らない。形ないものによって焼かれてしまう事を知らない。流されてしまう事を知らない。だから形づくるものたちは自らの手でつくりあげた形を焼き払い、流し去ってしまう。どうかこの星もそうでありますように、僕は祈る。

Yは一層表情を明るくし、意気揚々と歩いている様子だった。僕の足取りも次第に軽くなっていていた。他の参拝者たちの姿がいつの間にか見えなくなっていたけれど、それは構いやしないことだった。Yは軽い調子で口笛を吹き荒んで、草履ばきの足を投げやるように歩いていた。僕もまた倒れるように歩いていたのが、いつの間にか滑らかに歩けるようになった。靴が足に合ったようにも思えた。陽射しは強く、空は真っ青に眩しく輝いていた。汗が頸筋を流れるのがわかる。腹を擽る愉快な緊張を感じ、跳ね上がるような気分になっていた。Yもそんな僕の様子に気が付いた。「おお、顔色良くなったね」「そう？　ってか、そんなに悪かった？」「うん」「それはいつもじゃない」「そう。だから、もっと歩かないとね。陽を浴びよう、陽を。歩こう、早くいかないと、海がメインなんだし」「伊勢はなんのため？」「君の受験必勝祈願さ」「そいつはありがたい」「伊勢でいいのかな？」「どこでもいいさ」「それもそうだ。結局は君の実力次第だからね」「そうとも限らないよ」「まあ、言いたいことはわかる。だが僕が言いたいのは、君の実力なら、その他の要因が一切なければ受かるということだよ。それは良い要因も過剰になるし、悪い要因は繰り返されるべきでないってことだ」「ありがとう。それにしても、早く海みたいね」Yは頷く。

そして目の前には外宮の鳥居が大きく立っていた。「いよいよついたね」

鳥居をくぐって、そのまま参道を進んでいく。他の参拝者たちの姿が見当たらないことに一抹の不安を覚えながら、砂利道を踏みゆく。足許に薄らと立つ砂ぼこりに木漏れ日が辺り、きらきらと輝いている。そこに影が投影されると、浮かび上がってきそうであった。本殿には意外とすぐに着き、誰もいない境内を順々に巡っていく。橋を渡り、様々な神

に拝みをする。そこに挨拶以上の姿勢をつけてくれるものがあるとすれば、こうして周りを囲む森であり、小川のせせらぎであり、遠くへと退いた車の音、見えない場所での工事の音だった。Yもいつになく敬虔で厳かな表情をしていた。「屈せずして待つがますらをの事なりと言う」――森鴎外は『即興詩人』を訳してこんな詩句を捻りだした。狩人はやみくもに探しまわっているのではない。彼らが探すということは、同時に待つことに外ならない。彼らは常に狩りのため永遠に彷徨うだろう。そしてそれは待つことに外ならない。

船は沈みゆく、いつ来るかわからない海の底を目指して、痛みでしかない奥底を目指して。陽の光も届かない暗淵はどこまでも続き、一向に付きそうもない。それはただ沈んでいるだけではない。そして、海を漂うことにおいて、それは沈んでいない船と同じであった。それは探し求めていた。常に境界へと入りこんでいくことにおいて、それは沈んでいない船と同じであった。空と海の境界上を、船は漂流する。そしてそれはどこかの岸へ、あるいは港へ到着するのを目指して進んでいるかもしれない、けれどそれは同時に待つという行為を通して行われる。なにかをしていれば待っていないということではない。即ち、ただ待つということなどできやしない。退屈するということは、待てないということだ。

※

外宮を参拝すると、そのまま歩いて内宮へ目指すことにした。距離はだいぶあったが無理でない距離だし、途中の猿田彦神社も巡ることにしたのだ。二人は随分な早歩きだった。殆ど走っていた。それでも次々と車に追い越されていった。トラックにどんどん距離をつけられていった。だが、やがて二人は飛べるのではないかというほどの昂揚感を覚えた。それはまったく狂っていた。走っていれば飛べるのは飛行機だけだった。アホウドリだって高いところから飛び下りなければならない。飛ぶことのできる人間は、役小角くらいだった。それからカフカなら飛んだことはあるかもしれない。ペガサスは飛ぶだろうし、黒駒は聖徳太子を乗せて富士山を飛び越えた。そして僕らは狂っているから飛べそうだった。赤信号も止まらずにジャンプ一つで横断歩道を飛び越えていけそうだった。「なんだか足が勝手に動く気がしない？」「そうそう。廻り始めた車輪のようだ」「止める術はあるかな」「摩擦、とにかくそれだ」全く下らない狂気だったが、最高の熱狂だった。「身体が腐っていく感じがする」「まったくだよ。この暑さだから。全身汗となって融けてしまいそうだ」

陽射しは僕らの肉体を発酵させていた。ひとつひとつの細胞が溶かされていき、空気を包み込み始めた。それはもうじき浮かび上がりそうだった。夏の日差しは正午を迎えようとして、愈々なにもかも腐らせたり、発酵させたり、成長させたりするようになった。あらゆるものを増幅するのだ。まったくそれは残忍だった。僕は今自分がどんな姿かたちをしているのかが理解できなかった。但しそれは消えてなくなるというよりも、明確に神経で感じ取ることができる質感や動きを伝えるものだった。全身に巡らされた神経が、ひとつひとつ脳という中枢に注意を払われていた。

風景は遅く感じられた。ひとつひとつの細やかな瞬間がコマ回しの映像となった。しかしながら猿田彦神社にはいつまで経っても辿りつかなかった。当然内宮へも全く行ける様子がなかった。けれども二人は一気に駆けだし、なにも理解できなくなっていた。とにかく一台一台の車が横を通っているのは感知できた、けれどそれだけだった。道も良くわからないままに走っていた。とても遠いことだけはわかっていた。だから何処かで間違えると大きく逸れていく危険があった。そしてやはり、あるところで二人は息が切れ、その瞬間に今どこにいるのか、そして道は

あっているのかがわからず不安になった。僕らは唐突に我に返ったために、一気に途方に暮れてしまった。気付いた時には、落し物を落としてきたであろう場所は既に遠くなってしまっていた。最後に確認した時から時間もだいぶ過ぎてしまっていた。そんな焦慮に似ている。逆に、浜辺で自分の足跡と出遭った時に、それが誰かほかの人のものではないかと焦り出す、こうした感覚とも似ている。落し物が、あるいは忘れかけたものが突如現れた時の狼狽と焦りだ。

息を整えてから、二人は太陽の位置を確認し、方角を見定めた。そして内宮が外宮の南東にあることは判っていたから南東へと進んでいった。それでも、最初の地点次第では相変わらずとんでもない道を進んでいる可能性があることを否定できなかった。けれどもとにかく足を進ませた。時刻は十二時を廻り、一日の中で最も太陽が高い時間帯であった。肉体の熱を受け入れるほど空気は余裕がなかった。空気はむしろもっと熱せられていた。それでも空気は緊張しきって静寂を保っていた。愚行の後の緊張感は、後悔よりもむしろ未来志向的な状況にやってくる。贖うことに等しい苦しみを覚える。しかも愚行とは、恐らく理性と責任の関係とは大きく離れた場所で行われ、その緊張感を受け入れるには理性と責任の関係とは離れた場所にいなければならなかった。「大体こちらへ行けば大丈夫かな」暫く歩いて僕はつい訊いた。別段応えを求めてはいなかったが、「まあ、間違ってはないだろう」とYは応えた。「そういえば、こういうことテストの時にも良くあるなあ」「どういうこと?」「いや、ある瞬間あっという間に解答に至る道を進んでしまって、ふと我に返ると、どうしてその答えなのかがわからないままで迷ってしまうってこと。確信が持てなくて、確認しないといけなくて」「俺にはないが、まあ、それは大変だな、確かに」「計算の跡とか見ても信用ならなくて。例えば物理の時は再び微分していくんだ」「まあ、それ自体は苦でもなさそうだが」「いや、それが全然違う式が出て来る時があって」「じゃあ間違えに気付いたってことじゃないか」「そう。同じこと繰り返して、再び解いてみると、こんどは正しい答えが出てきて」「わけわからんな」「そう、結局どこで間違えたのかわからずじまいなんだ」「でも正解するんでしょう?」「まあね」「相変わらず成績いいもんな」

やがて草履ばきのYが歩き疲れた様子を見せ始めたころ、一軒のレンタルサイクルが目に入った。これは幸運と思い、Yと僕は店に入っていった。値段は今から借りて一五〇〇円でよかった。無論返しに来る手間はあったが、今は仕方がなかった。二台借りようと思い、誰もいない受付のところで声を掛けた。ところが応答がない。「すみませーん」Yが再度大声で呼びかける。しかし応答は一向になかった。もう一度だけYが声を掛けると、今度は漸く奥から「はーい」と返事が聞こえてきた。そして、なにやらガチャガチャ音がした後、背後の僕らが入って来たところから一人の中年の男が入って来た。赤い団子鼻に、ぎょろっとした目玉が特徴的だった。「すみません、お待たせしました」とその男は言った。「二台お借りしたいのですが」僕がそう言うと、男は「え!?」と聞きかえすような素振りをして、こっちを見かえす。なんだかとても慌てている様子であった。「だめなんですか?」Yが訊くと「いえ、そんなことは全くないのですが、どちらへ?」「内宮と、その後鳥羽へ行こうと思っていまして」「そうですか、そうでしたか」男は慌てたそぶりのまま、そう繰り返し、再び奥へと消えてしまった。僕らはすっかり肩すかしをくらったようで、呆然としていたのだが、その後に再び背後から現れると、「どうぞ、乗ってください」と行って、軽トラを指した。「いえ、自転車を借りたいのですが……」「丁度私も猿田彦神社横の警察署に用があって、そこから内宮はすぐですので」「……そうですか」Yと顔を合わせるが、ここはもう乗っていくしかなさそうだったので、僕らは言われるがまま乗り込んだ。

軽トラの中は一つの席に二人座り、ぎゅうぎゅうづめであった。けれ

ども、流石にあっという間に到着して、なんら苦にするところはなかった。「お二人はどちらから?」「名古屋からです」「名古屋ですか、実は私も名古屋出身でね」「そうでしたか、それでこちらの方言じゃないんですね」「ええ。まあこっちきて大分経つので、いつもは方言で話すこともありますが、仕事の時はそうしないですね。高校生?」「ええ、まあそうですね」「受験勉強はいいの?」「「貸し出した自転車でも時々盗まれることもありまして……困ったもんですが……そうだ……お二人は内宮をどれくらいの時間で廻るかわかりませんが、三時ころにもし鳥居のあたりにいて下されば鳥羽まで乗っけていきましょう。私、鳥羽にも用がありましてね」男は返事を待たずして信号を左折して、僕らに「着きましたよ」と言った。「内宮はこの道に従っていけばいいですから。ではまたあとで」「じゃあお願いします」Yがそう言って扉を閉め、僕らがすこし歩いていくと、男は走り去って行った。

そう言う訳で猿田彦神社に到着したのだが、急ぎ加減に参拝を済ませると直ぐに内宮へ向かった。あと二時間ほどで廻り切れるか見当がつかなかったのだ。それにお昼ご飯や、おかげ横丁へ行く予定もあった。そうして内宮へ向かうが、やはり一向に外の観光客や参拝客が見当たらない。全く誰もかれもが居なくなってしまったかのようだった。五十鈴川に掛る橋、その前に巨大な鳥居が立ち、左に曲がればおかげ横丁という辻に立つと、無人ということがひしひしと痛みのように感じられてくる。鼻の奥につんとくる冬の澄んだ空気のような、あの奇妙な、精神が鎮められていく感覚を思い出す。夏の日差しは突如、熱を喪った輝きとなった。それは冷たくも熱くもなく、ただの輝きとなった太陽は暴露されてしまうだろう。レンズ越しに見られた太陽が、その映像が現像される。そうして現れた太陽は、全く太陽とは違うはずだ。だが、それが暴露されているということかもしれないのだ。僕はじっとりとした背中が寒くなるのを感じた。耳元では誰のものかわからぬざわめきが聞こえる。それは浜辺での潮騒だが、眼前には海はなく、荒涼とした岩砂漠が広がっているようだった。やはりそこは浜辺などではない、単なる断崖絶壁であったのだ。そしてこの荒漠たる風景に、どうして誰もいないのか判りはしなかったが、風は確かに賑やかしている。当然のこととはいえ、街はどうして、こんなに混雑しているのだろうか?

そして僕らは無人の内宮へと入って行った。巨木が立ち並び、聞いていたよりもより鎮守の森は鬱蒼として、夏にも関わらずひんやりとした空気に包まれた。木漏れ日は数多の光明のようであった。そこになにものかがいるかのようだった。五十鈴川のせせらぎは、何を揺らしているのか、青い音は澄み渡っていた。

※

内宮を巡り、再び辻へ戻って来た時、時計は二時十五分頃だったため、お昼御飯をすませた。そして三時になると確かに、さっきの軽トラに乗って男は現れた。空だった荷台には三台の自転車が積んであった。男は、「乗ってください」とまたそれだけ言った。そして「ありがとうございます」と言って、Yと僕は乗り込んだ。窮屈で揺れる車内ではあったが、それでも鳥羽まで乗せていってくれるのは大変に嬉しいことだった。そして軽トラックは走り始めた。サイドミラーが反射して、太陽がすこし西へ傾き始めているのが判った。今日もこうして終わっていくのかと思うと、記憶と言うのはどれほどの引き延ばしが行われるのかと思った。それはたった一日だが、殆どが写真を大量に収めた分厚いアルバムとなっていく。たとえばYが被りもしない帽子を鞄から取り出した、という些細な瞬間でさえそれは記憶されていく。眼も耳も、何ものをも逃しやしなかった。

「どうでしたか?」と男が切りだした。初めての参拝に、ずいぶん感

銘を受けたYと僕が続けざまに感想を述べ立てると、男はこの二人の素朴な信心家の言葉に耳を傾けていた。そして男も自分が伊勢神宮に初めて行ったときの思い出を話してくれた。
「今はお伊勢さんの近くに住んでいるようですが、羨ましいですね」Yがそう言うと、
「いや、それがですね」と男が答えた。
「近くに住むようになってから、暫く行ってはいなかったんですよ。やはり近過ぎると、どうも足が遠のくみたいで」
「そんなこともあるものですか」もったいないとYは思ったであろう。
「そうなんですよ、けれどもね、最近数回続けざまに通っているんです」
「なにかあったんですか?」
「単純に近頃観光客が増えまして……」
「ああ、確かに今日もたくさんいましたもんね。勿論僕らもそのうちの二人なわけですが」
「そうそう、それで商売柄ここら一帯をきちんと知っておきたかったんですけれども、とにかくお伊勢さんについて全然知らないわけにはいかないと思いまして」
「そういうわけですか」なるほど、とYが頷く。
「しかしやはりいいところだとは思いますね」
「ええ、本当思いました」
「これから鳥羽に行くわけですが、あそこも凄くいいところですよ」
「海が見たいと思いまして」
「青春ですね」男はにやりと笑った。しかし僕は真顔で答えた。「そうですか?」
「ええ、私なんかも若い時はよく海に眺めに行ったものですよ」
「なぜなんでしょうね」
「美しさを求めてかな。そしてそれが如何なる姿をして——海藻や流木、腐った魚や、その臭いにつつまれて、そこにあるかを」男は懐かしげな面もちでそう語ったが、僕にはすこしわからない感覚だった。
「最近は行かないのですか?」
「まあ最近は忙しいですし、それに昔、溺れかけたことがありましてね」
「そんなことがあったのですか」Yはそう訊き返した。僕も意外に思った。なぜかわからないが、意外だったのだ。
「私本当は松阪の出身で、地元の友人たちとよく海に潜っていたんですよ」
「名古屋じゃなかったんですか?」
「ええ……その後名古屋へ一度大学のため言ったのです。……それで、潜ってはお腹がすくと魚やら貝やら獲っては焼いて食べていたんですが、ある時に溺れかけまして」
「それは大変でしたね」
「足がつったのか、何かに引っ張られる感覚がして、あの時はもう死んだかと思いました」「でもなんとか無事でよかったですね」
「ええ、全く。あ……もうそろそろ鳥羽に到着しますよ、海もじきに見えてきます」
「おお」Yは思わず声をあげた。コンクリートと木ばかりの道路をずっと走って来たが、曲がり膨らんだ道路を登り切ると、向こう側に水平線があらわれ、下り始めると田園の向こうに輝く西日、それを照りかえす海が目に入った。Yは凄く嬉しそうにしていたが、僕は寧ろ心の中の透明な物体が昇華していき、解体されたものたちの隙間が消えていくのを感じていた。僕は感涙を堪えていた。ひとつひとつのつながりが戻っていくようだった。
　男は鳥羽駅の前で僕らを下ろしてくれると、荷台に乗った自転車を貸してくれた。「ここの駅の駐輪場において帰ってくだされば、その後回収していきますので」「いいのですか?　先ほどからご好意に甘えてば

かりで申し訳ありません」「いいのですよ。さあ、行ってらっしゃい」男はそう言うと、僕らが自転車で走っていくのをすこし見て、走り去って行った。それにしても本当になにも語らない人だと思った。さっきの話も本当なのかどうかわからない。無論それはどちらでもいいことだったが、あの印象的な顔つきは当分忘れることはないだろうと思った。

「どこへいこうか？」Yは僕に訊く。「海ならそこでも見えるけれど、もっと向こうへ行ってみよう」そうして二人は海際の山道を自転車でとにかく走って行った。緩やかなスピードで、あらゆる景色はごつごつとした物体から、ねっとりとした液体へと変わっていった。時刻は四時を廻っており、西日が峰々の腹を熱く照らし上げている。こんなありきたりな光景にも妙に胸は弾んだ。海は黄金色の光を受けてより深い紺色へと移ろぎ、快晴のままだった空は薄い黄色に染まり、灰色の入道雲がぽかりと浮かんで動かなかった。それはどことなく造られた感じがした。僕にはまだ景色ひとつひとつが本物のように感じられなかった。そこにはあるべきものがない気がしたのだった。車は相変わらず僕らの傍を横切っていく。だけれどもその中の運転手を確認しただろうか？　僕は不信感に囚われていた。事物の人間の決定的なつながりがいまだに解けたままだった。

高所を走っていると、複雑な海岸線沿いの町々が現れたり消えたりした。そのありように次第に僕の頭は混乱してきた。一体海岸線がどうつながり、どう途切れているのか、町々はどうつながり、どう離れているのか、見えていない部分が多すぎて推測では補い切れなかった。いつまでも同じような風景だったのに、そのすべてが全く違った。空も海も、のっぺりと一様のようだったが、決してそうではない、海岸線の内側は、一瞬一瞬の風景がそれぞれに抽出され、同一化されることを拒んでいるようだった。全く移ろいやすい景色だった。そうして全てが個物的になっていくと、この世は継ぎ接ぎ担っていくだろう、誰のものでもなくなっていくだろう。僕はそのことについてなんとも言えない気分に囚われた、その考え方自体のどこかに誤謬があるならば、僕はなにも言えないのだと思った。ただしそれが誤謬を孕んでいるなどといつ判るだろうか。どうして誰かは他の誰かを名乗りたがるのだろうか。むしろ誰にもなりたくないからだろうか？　その時遠く線路を電車が走り抜けた。そして僕の中で電車の中での記憶がよみがえる。電車にのった数千回の記憶が混線してくる。聴こえてもいない電車の走行音が耳の奥で響き始め、通過していった。

数多くの港町や砂浜が過ぎて行った。ホテルもたくさんあったし、観光客が恐らく沢山訪れているのだろう。だが、人の影ばかりはやはり見えてこなかった。「随分と寂しい風景だね」「そうかな」「ひと気がないじゃないか」「そうでもないんじゃないかな」僕は自転車を漕ぐ足が疲れて来て、いったん休憩しようと提案した。すると巨大な架橋の手前に展望台のようなものがあったから、そこで一旦休んだ。そこから海の方を眺めると、牡蠣養殖の筏が沢山浮かび、海が所々黒い四角形によって埋められているのが目に入った。「やっぱり牡蠣の筏多いね」「そうだなー、牡蠣か、どうせなら食べたいよね」「今年はダメだよ。海が汚染されているんだ」「さっきの人が言ってたな」「そう言えば、さっきの人、名前なんて言ったっけ？」「あれ、確かに」僕はとっさに自転車を調べるが、張ってあった店のラベルには「イセ・レンタルサイクル」と店名が記されていただけだった。

※　※

休憩が済むと、二人は再び走り始めた。ぐんぐん広がる海との距離。どこまで広がっていくかと思った。だがどこまで行っても海は見えた。海は遙か下方から迫上がって来るようだった。前方にはトンネルがあり、

そこを抜けると崖際にくぼみがあったのでそこに自転車を停めた。辺りを見渡す。そして誰も見ていないのを確認すると、そのまま勢いよく崖に飛び込んだ。目指すは港。前方に海を臨み、砂煙をあげて豪快に足を滑らせる。延々と続く急な崖。その先には灌木が密生していており、そこに手を遣って、引っ掴むと辛うじて静止する。今度は傍らに足を置いて、コンクリートで固められた田んぼの縁を慎重に歩いていく。海とその向こうに沈みゆく太陽を横目に、腕を広げてバランスを取りながら歩いていく。万が一落ちてしまうと田んぼの泥に足を突っ込むことになる。全身がぐちゃぐちゃドロドロになる可能性もある。Yも僕もそこは真剣に渡った。そして向こう側に着けば、高めの段差を一気に飛び降りて空地へ入り、民家と民家の間を抜ける。すると道へ出た。だがその瞬間、自動感知で作動するインターフォンがけたたましく鳴り、右手の家の塀越しに犬が力づよく吠えつける。先ほどまで全く閑寂としていたところに不意な警戒音が続けざまに響き、Yも僕も心底驚いた。そしてそこから全速疾走をした。思わず笑いながら走った。息苦しさは酷かった。

走り始めて間もなくすると、墓石や地蔵の石像が密集している場所にでた。そこは寺院だった。その境内を抜けていこうとすると「津波碑」の立っていることに気が付く。思わずここでいったん立ち止まり、僕らはただ気分が鎮まっていくのを感じていた。しかし暫くして、僕はやはり迫りくるものを感じた、逃げなければならないという強迫的な衝動に駆られた。Yが見えなくなりそうだった……Yはどこにいるのだろうか……確かに聞こえる、Yは僕の名を呼んでいるのが……小さな宿場や見ず知らずの町の民家が続いてく細道を走り下っていく。その玄関口にはどれも「蘇民将来」の注連縄がしてあることに注意がむく、見ず知らずの人々は、見ず知らずということを警戒しているようだった。そして不図右を見れば自販機が彷徨い歩くように、異物として立っていた。

僕にもまた、ただ脚を動かすように駆り立てる不信感があった。それは自分が明確に異物であると感じる、そういう不信感だった。そして異物として僕は漠然たる状況に包まれた。そこに僕を形づくるものは何もなかった。僕はその時何も考えられなかった。ただ感覚だけが僕の肉体を動かし、思考を司った。どちらに曲がるべきか、僕は眼と耳で全ての判断をした。全く誰も追ってくるわけでもないのにもかかわらず、僕は自分の長く大きくなった影に怯えるようにして逃げ回った。僕は影が離れ得ないものだという当然のことを次第に了解していった。そして間もなくして港に出た。背後からYが追いつく。

すると二人の眼前には深いコバルトの海が広がっていた。その海に顎をつけた太陽は燃焼する巨大なナトリウムになっていた。鴎が鳴く声を聞いた。その甲高い声に合わせるように、遠くで船笛が低く鳴らされる。港を囲む山がその音を跳ね返す。船はどこを航っているのか、鴎はどこを飛んでいるのか、それは判らなくなった。海に囲まれているようだった。見えているのは海ばかりだった。けれどそこには揺られる船、牡蠣の養殖筏、コンクリートの堤防、整列されたビットがある。船もビットも塗料が禿げた場所から潮風に侵されていた。筏は黒々として、表面に巨大なゴムのような質感がした。海へと延びていく堤防の先端まで行くと、穏やかな海を前にして、Yも僕も暫く黙っていた。濃厚な磯の匂いは、鼻に微かな痛みを走らせ、口の中を乾燥させた。白波の立つ音は、聞いていると呼吸のリズムが次第に合わさっていく。すこし早めで、けれども息苦しくもないリズム。精神は鎮められ、感覚は鋭くなっていくのを感じる。浜辺を喪った僕は今、海を取り戻した。淵へと身を落としていこう、この明るく清澄なる海へ身を浸して、対岸との間にあるこの淵へと沈んでいこう……。僕はこの断裂の中の繋がりを見つける方法を手に入れたのだ。

そのうちYはこの誰もいない港を散策したり、写真や動画を撮ったりし始めた。僕も彼と同じように戯れに写真を撮ったりしたが、堤防伝い

に歩いて港から大分離れたところで、Yが海に入ろうろうと言い出した。特に着替えや拭く者も無かったが僕もそうしたいと言った。そして服を脱ぐとYも僕も汚された海に飛び込んだ。底は深く足が届くわけではなかったが、すうっと力が抜けて浮かび上がった。そして逆に軽く力めば潜ることができた。眼を開ける事は出来なかったが、その暗闇の中で僕は泳いだ。海中で波に揺られ、初めは冷たかったが次第に慣れてきた海水に浸っているうちに、僕はすっかり眠たくなってしった。まだ浮かんでいるYにあがると告げ、先に堤防で身体を乾かそうと横になる。そのうちYも上がってきて乾かし始めた。その時Yが何か話しかけて来ていたはずだった。けれども僕はもう眠りに落ちてしまっていた。残照は温かく僕の身体を乾かしてくれた。

※　※　※

持ち主がいなくなった途端に騒がしくなるものたち、この部屋は昨日こんなにも散らかっていただろうか?……僕は帰宅するなり嫌な予感とともに見つけ出した、なにかが染み出している段ボール箱。近づけば臭いが強くなる。けれども僕はそれに手を差し出し、箱を開いた。そしてその中には、たくさんの夏みかんが入っていた。爽やかな中に、どろっとした苦い臭いがする。すこしのけてみると、下の方は傷んで腐り始めていた。

《了》